

(エ) 論文要旨

|  |
|--|
| <p>論 文 要 旨</p>   |
| <p>申請者氏名 倪 秀梅</p>  |
| <p>申請学位 博士</p>   |
| <p>主論文題目</p>   |
| <p>日本語の身体語彙とその慣用表現<br/>—「二次」「三次」身体語彙を中心に—</p>  |
|  |
|  |
|  |
| <p>主論文要旨 (邦文は4,000字以内<br/>外国語は2,000語以内)</p>  |
| <p>人間は世界中どこにあっても、同じ身体構造を有し、しかもその身体の各部位は同じ生理的な機能を果たしているため、これらを表す身体語彙は、人間の基本的、かつ、素朴な喜怒哀楽の感情、思考や微妙な心理状態などと深く関わっているものと思われる。</p> <p>したがって、これらの身体語彙を構成要素として持つ慣用表現は、世界各国のどの言語においても、数多く存在しているのは言うまでもないことであろう。</p> <p>日中両国は同じアジアの漢字文化圏の国であり、昔から相互に文化、制度、習慣、風俗など数多くの面で交流してきたため、両言語に数多く存在している身体語彙、及び身体語彙慣用表現は、意味用法においても、使用範囲においても、共通するところは少なくないが、一方で、両国は異なる文化、言語意識、生活習慣、風俗を持つことから、重なり合うように見える慣用表現も、それらによって生じた物事に対する考え方の違いの影響を受け、相違点が随所に見られる。</p> <p>そこで、本論文では、これらの身体語彙、及びそれらを構成要素として持つ慣用表現について日中対照研究を行い、日中両言語の慣用表現の全体像に少しでも迫り、そのことで、外国語教育や翻訳などの分野においても有益なものを提示できればと考える。</p> |

振り返ると、これまでに、当該分野に関する対照研究が多くの研究者によって、さまざまな視座から考察が行われてきたが、これらの研究はほとんど具体的な身体部位、例えば、頭、目、口などを表す、本論文のカテゴリーでは「一次身体語彙」と呼ぶもの、及びそれらの語彙を含む慣用表現を対象としたものであり、身体部位が果たしている生理的な作用や、それによって生じた生理現象などを表す、本論文で言う「二次身体語彙」、「三次身体語彙」、及びそれらの慣用表現に関する研究は、管見では、極めて僅かであり、研究の不足している領域だと思われる。

したがって、本研究は、先行研究を踏襲したうえで、「身体語彙」、「身体語彙慣用表現」の2つに分けて考察を進めた。

始めに、従来「身体語彙」と呼ばれていたものについて検討し、特にこれまであまり触れられていない具体的な身体部位が果たしている生理的な作用や、それによって生じた生理現象などを表す語彙をそれぞれ「二次」、「三次」身体語彙として位置付け、その整理を行い、次に、それらの語彙を構成要素として持つ慣用表現について、日本語と中国語の対照を通して、両言語の特徴の一端を探ることにした。

本研究の目的は以下の3点である。

一つ目は、先行研究を踏まえた上で、従来の「身体語彙」の定義を再検討し、加えて、「二次・三次」身体語彙を採集、整理することである。

二つ目は、身体語彙慣用表現の先行研究を踏襲したうえで、辞書・研究書類、『分類語彙表』での取り上げ方を整理して、身体語彙を構成要素として持つ慣用表現について分析をし、「一次～三次」の「身体語彙慣用表現」の実像に迫ることである。

三つ目は、身体語彙とその慣用表現、特に「二次身体語彙」、「三次身体語彙」とその慣用表現を対象とし、日中両言語におけるこれらの慣用表現の比喩形式、意味用法に見られる相違を考察し、両言語の特徴を探ることである。

本研究の意義としては以下の3点が挙げられる。

第一は、「二次身体語彙」「三次身体語彙」を含めた「身体語彙」を整理することによって「身体語彙」の新たな位置づけが得られることである。

同様に、「二次身体語彙」「三次身体語彙」を加えた「身体語彙慣用表現」研究の新たな進展を切り拓くことも期待される。これが第二の点となる。

第三点としては、日中両言語における身体語彙慣用表現の異同を考察することで、慣用表

現の日中対照研究の発展の一助とし、中国語母語話者の日本語習得に寄与することである。

本論文は大きく「身体語彙」と「身体語彙の慣用表現」の2つの部分に分かれ、以下のよう  
に構成されている。

序章では、先ず本研究の背景、目的、意義、方法と手順など基本事項について述べ、本論  
文の構成及び各章の概要について記した。

第2章では、日本語の「身体語彙」に関する先行研究を概観したうえで、従来の「身体語  
彙」の定義を再検討し、「二次・三次」の身体語彙を身体語彙として位置付け、その分類、  
整理を行った。

第3章では、先行研究を踏まえて立てた「一次身体語彙」、「二次身体語彙」、「三次身体語  
彙」の3類型を基準に、『分類語彙表』を資料として、対象範囲を広げて身体語彙を採集し、  
そのうえで、「一次身体語彙」については、その所在位置、「二次身体語彙」・「三次身体語彙」  
については、その語の「発現要因」という下位分類基準を設け、それぞれに所属する身体語  
彙数を確認し、さらに「語種」と、品詞性の面からこの三種類の身体語彙の特徴について考  
察した。

第4章では、日本語の慣用表現に関する先行研究を概観したうえで、呉(2017)の区分に  
倣って、呉の区分で触れられていない芳賀(1911)や、横山(1935)、それに外国語との対  
照研究の現状や問題点などについて検討し、本研究の慣用表現に関する時期区分を試み、本  
論文で取り扱う慣用表現の定義と範囲を定めた。

第5章では、日本語の「身体語彙」を含む慣用表現に関する先行研究を概観した上で、本  
研究の身体語彙の課題について検討した。

第6章では、まず、七種の慣用句辞典、研究書を対象として調査を行い、「一次～三次」  
身体語彙を構成要素として持つ慣用表現を採集した。

次に、『分類語彙表』に収録されている慣用表現を採集して、調査の範囲を広げた。

さらに、採集した「一次～三次」身体語彙を構成要素として持つ「慣用表現リスト」を作  
成し、品詞性分類や、統語的構造の分析、後接する助詞の共起状況について調べた。

第7章では、比喻形式の概念、加えて日本語の比喩的慣用表現に関する先行研究、及び中  
国語における慣用表現の先行研究を概観したうえで、本研究における日中両言語の慣用表現  
の対応関係を検討した。

第8章では、まず、複数の国語辞書と中国語辞書の記述をもとに、第6章で述べた「二次」・

「三次」身体語彙慣用表現数のそれぞれの上位3位までの語である「血、息、力」(二次)、「気、意、念」(三次)の「基本義(元来の意味)」、及びこれらの語彙を構成要素とした熟語や慣用表現における「拡張義(拡張された意味)」を検討した。

次に、第6章で採集した「二次」・「三次」身体語彙で代表的な「血」と「気」を構成要素として持つ比喩的慣用表現を対象に、複数の慣用句辞書及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス(『BCCWJ』)』、『北京語言大学汉语语料(北京語言大学漢語コーパス、『BCC』)』から採集した用例を用いて、それぞれの慣用表現にどのような比喩形式が用いられ、それに対応する中国語表現がどのようなものであるかを考察し、両言語の持つ特徴の一端を探ってみた。

第9章では、本論文全体をまとめ、今後の課題について述べた。

本研究は、先行研究を踏襲して、従来の身体語彙の定義を再検討し、「身体語彙」を整理することと、日中両言語の書き言葉における身体語彙を構成要素として持つ慣用表現の相違を考察し、日中両言語の比較対照を通して、それぞれの言語の持つ特徴を明らかにすることを目的としたが、身体語彙の基本義、拡張義に関する研究は「二次」・「三次」身体語彙の上位3位である6つの語にとどまり、身体語彙を構成要素として持つ比喩的慣用表現の日中対照も、「二次」・「三次」身体語彙のそれぞれの代表的な語である「血」と「気」の慣用表現の一部に絞って行うまでにとどまった。

したがって、今後の課題として、次の2つを挙げておきたい。

1) 本論文で扱えなかった「二次」・「三次」身体語彙の基本義、拡張義の日中対照、及びそれらの語彙を構成要素として持つ比喩的慣用表現の日中対照。

2) 中国語母語話者の日本語習得の促進のため、身体語彙慣用表現をどのように教材化すべきか。

以上が本論文の要旨である。